

令和元年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要  
農産・蚕糸部門

ICT の活用による作業の省力化と基本技術の徹底による安定生産を両立

○氏名又は名称 渡 基文

○所在地 北海道河西郡更別村

○出品財 産物（小豆）

○受賞理由

・地域の概要

北海道河西郡更別村は、総土地面積の約70%が畑作地である。農家1戸当たりの平均耕地面積は50haを超えており、大型機械を用いた大規模畑作経営が展開されている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

渡基文氏は、機械作業を1人で担い、約44haの畑地において畑作4品目（豆類、小麦、てん菜、ばれいしょ）に加え、省力的な管理が可能なスイートコーンを作付けしている。ほ場条件に適した品種選定や基本技術の徹底等により、作付品目の多くで北海道平均を上回る高単収と高品質生産を実現している。

・受賞者の特色

(1) 適正な輪作体系の構築

4年輪作を維持し、連作を回避することで、土壌病害虫の発生軽減を図るとともに、耐病性の高い品種を導入することにより、高品質な農作物安定生産に努めている。

(2) 継続的な土づくり

石礫が多く、肥料抜けが激しい土壌条件下において、4年に1回、秋まき小麦収穫後のほ場に牛糞堆肥を施用することに加え、豆類や秋まき小麦作付前のほ場にも豚糞ペレット堆肥をそれぞれ投入し、地力の維持・増進を図っている。また、緑肥作物の導入により、植物寄生性線虫の密度を低下させるとともに、地上部を畑にすき込むことにより肥沃な土づくりを進めている。

(3) 省力化・コスト低減の取組推進

自動操舵システムを備えたトラクターを導入し作業精度の向上や労働負担の軽減を図っている。また、可変施肥機能を有したワイドスプレッダを導入したことにより、過不足のない均一な施肥を行い、肥料費の低減を図っている。

(4) 基本技術の徹底等

天候はもちろんのこと、圃場をよく観察し、適期は種、適期追肥など作業適期を逃さないよう心がけている。また、定期的に土壌診断を実施して、各作物に適した環境を維持するなど、基本技術の徹底に努めている。

・普及性と今後の発展方向

自らの経営で得た知識や技術を積極的に若手農業者へ伝えるとともに、最先端の農業機械や栽培技術を地域でいち早く導入し、その効果を実際の経営の中で他の農業者へ示すことにより、新たな作業体系の地域への普及にも貢献している。

今後は、更なる規模拡大を視野に入れ、引き続き、4輪作を基本に、継続的な土づくりや基本技術を徹底し、高品質な畑作物の安定生産を目指している。

令和元年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要  
園芸部門

地域密着型の省力的栽培体系により合理的経営を実現

○氏名又は名称 藤盛 元・藤盛 ひとみ

○所在地 北海道有珠郡壮瞥町

○出品財 経営（りんご、おうとう、ぶどう）

○受賞理由

・地域の概要

北海道有珠郡壮瞥町は、道南西部に位置し、道内においては比較的温暖で少雪な地域である。壮瞥町の基幹産業は農業と観光であり、藤盛氏の経営する「フジモリ果樹園」が位置する滝之町は、果樹専業経営が多い果樹産地の中心である。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

藤盛氏は、昭和59年、大学卒業と同時に就農。水田・畑作・果樹の複合経営をしていたが、平成元年、父から経営移譲したことで、果樹専業の経営へ転換。機械化を考慮した園地整備や多品種化による収穫時期の分散、マメコバチによる受粉作業の軽減など、労働生産性を向上させる栽培体系を実現した。現在では、りんご3ha、おうとう1.6haなど、計5.9haの経営規模を持つ。また、販売体系も市場出荷から直売所やもぎ取り等の対面販売に移行し、地域密着型の安定した経営を行っている。

・受賞者の特色

(1) 地域における先駆的な栽培技術等の導入

壮瞥町では、少雪の影響で凍害が発生しやすく、おうとうにおいて樹の経済寿命が短かったため、剪定などの技術が普及していなかった。この状況に、コルト台木が凍害に強く地域の土壌に適応すると考え、先んじて導入。また、山形県から講師を招き、率先して剪定技術を学ぶなど、地域におけるおうとうの安定生産、品質向上を率いる役割を果たした。その他、霜害による被害軽減のための防霜ファンを道内初設置、機械化に対応した直線的園地の育成にも取り組んだ。

(2) ゆとりのある経営の実現

藤盛氏は、果樹農業の課題である労働集約的で作業時間が長いことに問題意識を持ち、省力栽培による労働時間の縮小や休園期間、定休日設けるなど、ゆとりのある経営の中で、一定の収益を上げる工夫を積極的に行っている。

・普及性と今後の発展方向

加工向け果実の生産や加工業者への原料供給など、ニーズに対応した生産・販売を行っており、取組は、地域の生産者へ大きな影響を与えている。また、果樹産地の維持における問題意識も高く、担い手対策等へも積極的に参画しており、これらの姿勢は果樹産地の維持・発展に向けた牽引役として一層の活躍が期待されている。

令和元年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要  
畜産部門

環境にやさしい飼養管理による鶏肉生産と耕畜連携・循環型農業を実践

○氏名又は名称 株式会社アイオイ(代表 五十嵐 忠一)

○所在地 山形県最上郡鮭川村

○出品財 経営(肉用鶏)

○受賞理由

・地域の概要

鮭川村は、山形県最上地域の北西部に位置し、山形県内でも豪雪地帯として知られている。平成30年時点、最上地域の畜産農家数は235戸で、山形県全体の約20%を占め、このうち採卵鶏経営が5戸、ブロイラー経営が4戸である。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

代表取締役の五十嵐氏は、昭和54年からブロイラー経営を行ってきた。平成18年に株式会社アイオイを設立して、以後、徐々に飼育羽数を増羽しており、平成30年11月時点の飼育羽数は、約15万羽、年間出荷羽数は90万羽で、山形県内では最大、南東北地域でもトップクラスの規模を誇っている。

・受賞者の特色

(1) 効率的で衛生的にも優れた環境にやさしい飼養管理

全自動ウインドレス鶏舎を用いて、コンピュータ制御による効率的な飼養管理を行っている。また、モニターによる鶏舎内の常時監視、農場HACCPの導入、自社所有の飼料運搬車の利用等により、衛生的にも優れた飼養管理を行っている。さらに、鶏舎内の給温や消毒後の鶏舎内乾燥には、鶏糞を燃料とする鶏糞温水ボイラーを用いており、化石燃料使用量の削減及び環境負荷の低減を図っている。

(2) 耕畜連携・循環型農業の推進

飼料用米の利用を積極的に進めており、鶏糞温水ボイラーの焼却灰を特殊肥料として、自社が購入する飼料用米の生産農家に供給している。また、従来粉状で供給していた焼却灰について、粉塵飛散の防止により使用農家の利便性を図るために造粒装置を導入するなど、耕畜連携・循環型農業の推進に努めている。

・普及性と今後の発展方向

今後も飼育羽数の増羽を予定しており、鶏肉の出荷先も安定していることから、効率的な経営がより期待できると思われる。また、自社生産の鶏肉の販売直営所を併設した鶏肉加工施設の新設が計画されており、飼育羽数の増加に伴う雇用数の増加と併せて地方雇用の創出も期待できる。

令和元年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要  
林産部門

伝統を守り、次世代の担い手を育てる林業家

○氏名又は名称 須藤 義朗

○所在地 栃木県大田原市

○出品財 経営（林業経営）

○受賞理由

・地域の概要

大田原市は、栃木県東部に位置し、福島県から栃木・茨城県境を南下し筑波山に至る八溝山地を有し、優良材と評価される「八溝材」を生産する古くからの林業地帯となっている。冬期は降雪が少なく、夏期の台風被害も少ないなど、気象害が発生しにくく適度な降水量があり、素性の良い木材の育成に適している。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

須藤氏は、約 200 年前の江戸時代後期に林業経営を始めた先祖から数えて 5 代目にあたる。所有山林の集約化や路網整備を先祖代々積極的に行なってきたり、現在の効率的な経営基盤が形成された。木材価格が低迷するなか、製茶業等との複合経営を行なうことで、収益の安定性を確保している。

・受賞者の特色

(1) 高付加価値材の生産

所有山林のうち、林齢 80 年以上の林分は約 9 ha あり、これらの林分から注文材として長尺材や大径材の出荷を行っている。また、20 年前から取り組んでいる葉枯材は建築事業者から定期的な注文があり、こうした高付加価値材の生産は、木目が均一で赤みが美しく、欠点が少ないといった特徴が有し、優良材と評価される「八溝材」のブランド力を向上させるものとなっている。

(2) 森林組合長として地域を牽引

平成 19 年度には、大田原森林組合の代表理事組合長に就任し、大型の高性能林業機械の導入による高効率作業システムの構築や人材育成に力を入れ、森林組合の経営改善に取り組んできた。また、山林経営に関心が薄い森林所有者への働きかけを積極的に行い、間伐の推進や森林施業の集約化に寄与した。現在の丁寧な作業の実施と利益還元により森林所有者から信頼される森林組合となるための体制づくりに尽力してきた。

・普及性と今後の発展方向

須藤氏のようにきめ細やかな森林整備によって生産される高品質材が、伝統ある「八溝材」のブランド力の維持に貢献している。森林組合長として多くの功績を残し、現在も地元高校生や小学生に対する体験イベントを継続的に実施しているなど、次世代を育てる地域林業の指導者としての活躍が期待される。

令和元年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要  
水産部門

江崎のかあちゃんたちが自信をもってお送りするふっくら・  
ジューシー無添加減塩ソフトひもの(レンコダイ)

○氏名又は名称 JF 江崎フレッシュかあちゃん (代表 児玉 カズエ)

○所在地 山口県萩市

○出品財産物 (水産加工品)

○受賞理由

・地域の概要

山口県萩市江崎地区は、島根県との県境に位置し、穏やかな天然の入り江が特徴的である。定置網漁業のほか、アマダイなどの延縄漁業が行われている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

出品者であるJF江崎フレッシュかあちゃんは、平成17年に、江崎地区漁協女性部の有志12名によって設立された。設立以来、地元水産物を使用した惣菜を製造し、地元の道の駅やスーパーで自ら販売を行っている。「さざえ飯」や「いか飯」は、特に評判が良く、「さざえ飯」は20年に、「いか飯」は24年に「やまぐち農山漁村女性起業統一ブランド」に認定されている。

・受賞者の特色

(1) 製品製造のきっかけ・思い入れ

アマダイの延縄漁業で混獲されるレンコダイは、まとまったサイズや個数がなく、身は硬くパサパサしているため商品価値が低い魚となっていた。そこで、レンコダイを加工し、ジューシーでふっくらした干物を造りたいという思いから開発を行った。

(2) 製品製造の工夫

原料は地元の漁業者が漁獲した新鮮なものに限って使用している。オゾン殺菌機能付き冷風乾燥機を使用し、従来に比べて短時間でふっくらジューシーなソフト干物製造を可能とした。

・普及性と今後の発展方向

「道の駅ゆとりパークたまがわ」が主な販売先であるので、県内外へのPR効果につながっていると考えられる。また、レンコダイだけでなく、定置網漁業の漁獲物で市場価値の低い未利用魚を原料とした、干物製造による付加価値向上を目指した製品開発も行っている。今後の活動にあたっては、女性部以外の地元の方に参加してもらい、漁村地域全体の活性化につなげたいと考えている。

令和元年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要  
多角化経営部門

畜産を中心とした6次産業化のパイオニア

○氏名又は名称 有限会社 船方総合農場（代表 坂本 賢一）

○所在地 山口県山口市

○出品財 経営（酪農・水稻等）

○受賞理由

・地域の概要

船方総合農場のある山口市阿東徳佐地区（旧阿東町）は、山口県北部に位置する中山間地域で、畜産をはじめ農業が盛んな地域である。当地区では、高齢化・人口減少が深刻で、主要産業の農業も農家人口・農業就業人口ともに今後10年で半減が見込まれるなど、担い手の確保が大きな課題となっている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

昭和44年に、現代表の父が酪農とシクラメン栽培を柱とする任意団体「船方総合農場」を設立したのが始まりである。47年に法人化し、酪農経営を中心に地域と連携しながら経営規模を拡大してきた。1次、2次、3次産業毎に別会社を設立し、グループで連携して約30年前から6次産業化を実践していた先駆的な事例である。

現代表の坂本賢一氏は、生産と消費の状況とバランスを見極め、これまでの規模拡大路線を見直し、現時点においてもっともグループの強みを活かせる適正規模へと転換を図った。転換に当たっては、グループ内での確に連携・補完することで、各社において利益が確保されている。

・受賞者の特色

（1）一頭管理による高い乳質・乳量の実現

毎月の乳量検定の結果により、牛群を3群に分類してTMR配合割合を独自に設計するなど、1頭ごとに管理している。WCSを含むTMRベースの飼料と産乳量に応じたトップドレスを連動スタンションにより給与している。その結果、乳脂肪率4%以上、搾乳牛1頭当たりの平均年間産乳量10,000kg以上を実現している。

（2）消費者視点を重視した6次産業化を実践

安心・安全な顔のみえる農産物づくりを土台に、通常の6次産業化の1次（生産）→2次（加工）→3次（販売・サービス）の順番ではなく、船方総合農場での生産の次に（株）グリーンヒル・ATOによる都市と農村の交流を行い、商品を製造する前に確実に購入する顧客を獲得してから、（株）みるくたうんにより消費者ニーズを踏まえた加工・販売を行っている。また、みどりの風協同組合による企画・調整機能も相まって、グループ全体で安定的な経営を実践している。

・普及性と今後の発展方向

6次産業化の先駆けとして全国の法人経営の模範となるような活動を展開。今後は、生産と消費のバランスを見極めた生産体制を維持するとともに、6次産業化の充実を図り、積極的な販路の拡大に取り組むこととしている。

令和元年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要  
むらづくり部門

伝統的な漁村文化の継承と活用をめざしたむらづくり

○集団等の名称 由良地域協議会「ゆらまちっく戦略会議」（代表 齋藤 勝三）

○所在地 山形県鶴岡市

○受賞理由

・地域の沿革と概要

由良地区は、山形県鶴岡市の海岸部に位置する漁村地帯であり、「東北の江の島」とも称される白山島を擁し、「日本の渚百選」と「快水浴場百選」に選ばれた由良海岸、蜂子皇子と八乙女伝説の奇岩・八乙女浦など、恵まれた自然景観を有している。主要産業は漁業で、由良漁港ではサケ、タラ、タイ等の水揚げがあり、漁獲量、生産額とも山形県全体の10%を占めている。

・むらづくり組織の概要

- ① 平成19年に地元漁業者等の若手有志で結成された「チームTARA」が中心となり、衰退した地域を再生すべく恵まれた地域資源を地域の内外に広く伝える取り組みを始めた。
- ② その後、自治会や観光協会、漁業団体に呼びかけ、都市住民との交流や魚食の普及、地域における漁村文化の継承など、具体的な活動により、由良地区の活性化と新たな地域づくりを図り、21年3月に由良地域協議会「ゆらまちっく戦略会議」を設け、活動を本格化させた。
- ③ 漁協女性部由良支部の有志で結成した「ゆらまちっく海鮮レディース」は、魚食文化の伝承や商品開発、魚食普及を目的に活動している。

・むらづくりの取組概要

(1) 漁業生産面

- ① 「由良港大漁祭」等の魚食イベントでは、魚介類の販売や宿泊客への魚介類提供による魚の消費拡大を図っている。また、これまで東北地方で注目されてこなかったトラフグやマフグ等の情報発信に取り組むほか、神経締めしたサワラをブランド化し、山形市や仙台市の近隣市場に加え、江東区豊洲市場への出荷を開始する等販路を広げている。
- ② 「ゆらまちっく海鮮レディース」は、商品価値が低い小鯛や小型のタコにスポットを当て、焼いた小鯛を乾燥させた地域伝統のだしやそのだしを練り込んだうどん、味を付けて煮たタコを乾燥させた商品等を開発・販売し、水産加工による所得の向上を図っている。

(2) 生活・環境整備面

- ① 漁業・漁村への関心を高めるため、小中学生向けの漁業体験メニューを提供するとともに、由良港で行われている漁法や由良地区の伝統文化、記録等を映像化し次世代に継承する取り組みを行っている。
- ② 漁業者の減少に伴い存続が難しくなっていた白山神社の祭り「海中神輿」を活性化させるため、ウェブサイト等でPRし、現在では漁業者と住民を結びつける一大イベントとなっている。
- ③ 小中学生向けの体験メニューや海水浴シーズンを避けたイベント、海岸のゴミ拾いのスポーツ化等により、交流人口の拡大に取り組んだ結果、30年のツーリズム利用者は1,200人にまで拡大している。

・他地域への普及性と今後の発展方向

伝統的な漁村文化を継承していくため、祭りの活性化や地域の催事等の映像化、女性を主体とした6次産業化等による漁業者の所得向上、都市農村交流活動等に取り組んでいる事例であり、今後の発展が大きく期待できる。漁村としての地域の振興を目指し、協議会と地域住民が一体感を持って活動する取り組みは、全国におけるむらづくりのモデル事例になり得るものである。